

# 格助詞相当形式「ンドゴ」

玉 懸 元

## はじめに

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、格助詞相当形式「ンドゴ」に関する調査を行なった。本稿は、その調査結果を報告し、考察を行なうものである。

## 1 調査の目的と調査文の設定

気仙沼市方言には、「ンドゴ」という形式がある。その異形態として、一拍の長さを持たない「ン」を伴った「ンドゴ」や、「ン」を伴わない「ドゴ」や、それぞれの濁音が清音となった「ントコ」「トコ」「トコ」など、多様な形がある。ここでは、気仙沼市方言においてもっとも多く観察される「ンドゴ」を代表形としておく。

この「ンドゴ」は、いわゆる目的語に後置され、格助詞を伴った形に相当する形式を作る。たとえば、行方不明になった飼い犬を探してきてもらうに際して、次のように言う。

(1) ウチノ イヌンドゴ サカ° ステキテ ‘うちの犬を探してきて’

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、この「ンドゴ」に関する調査を行なった。具体的に関心を持ったのは、次のような点である。

㉑ 「ンドゴ」は、どのような世代・性別において用いられているのだろうか。

㉒ 「ンドゴ」は、どのような用法を持っているのだろうか。具体的には、どのような名詞に対して用いられるのだろうか。たとえば、東日本諸方言に分布する「ンドゴ」やそれに類するものについては、有生名詞に対して用いられる一方、無生名詞に対しては用いられづらいものであることが明らかにされている（宮島達夫 1956、北条忠雄 1967、佐々木冠 1998・2004、日高水穂 2000、玉懸元 2002・2003・2011 など）。また、同じ有生名詞でも、特定のそれ（名詞「犬」の場合、ポチならポチという犬）を表す場合には「ンドゴ」の類が用いられやすく、一方、不特定のそれ（名詞「犬」の場合なら、犬という動物一般）を表す場合には用いられづらい方言があることも指摘されている（玉懸元 2002・2003 など）。以上の点、気仙沼市方言の「ンドゴ」については、どうだろうか。さらに、その名詞が述語動詞とどのような関係にあるかという点も、「ンドゴ」を使用することの適否にかかわってはいないだろうか。たとえば、(1)の「イヌ」は、「サカ°ス」という、いかにも他動詞らしい述語動詞を中心として描かれる事態（文）の項である。この述語動詞が自動詞的なものになった場合、同様に「ンドゴ」を使用できるのだろうか。

以上の関心に応じて、次の〔1〕～〔5〕を調査文として設定した。

〔1〕〔飼い犬が行方不明になった〕うちの犬ンドゴ 探してきて。

〔2〕〔飼い犬が行方不明になった〕うちの犬ンドゴ 知らないか？

〔3〕〔今度犬を飼うことになった〕どっかで犬ンドゴ 探してきて。

[4] まんじゅうンドゴ 買ってきて。

[5] グラウンドを走っている犬ンドゴ 見えるか？

これらの調査文は、上記⑥の関心に応じて作成したものである。上記④の関心については、この[1]～[5]による調査を通して、明らかになるものと考えた。

## 2 話者

筆者の調査（面接調査）には、気仙沼市出身在住の 72 名の方から協力を得た。その内訳は、次の通りである。

- ・高年層（60 歳以上） ……22 名（男性 12 名、女性 10 名）
- ・中年層（40・50 歳代） ……16 名（男性 8 名、女性 8 名）
- ・若年層（20・30 歳代） ……14 名（男性 6 名、女性 8 名）
- ・少年層（高校生） ……20 名（男性 10 名、女性 10 名）

## 3 調査結果

### 3.1 「ンドゴ」を使用する世代・性別

調査文 [1]～[5] のいずれにおいても「ンドゴ」を使用しないと回答した話者（すなわち、「ンドゴ」を使用しないと考えられる話者）は、高年層女性 1 名、中年層女性 2 名、若年層男性 2 名のみであった。気仙沼市方言における「ンドゴ」は、老若男女の別なく用いられるものであることが分かる。

なお、以下では、「ンドゴ」を使用しない話者 5 名を措いて、調査結果の報告と考察を進める。

### 3.2 「ンドゴ」の用法

調査文 [1]～[5] のように「ンドゴ」を使用するか否かを尋ねたところ、次の結果を得た。

(2) 調査文 [1]～[5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数

- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 63 名 (94.0%)
- ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 47 名 (70.1%)
- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 23 名 (34.3%)
- ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 8 名 (11.9%)
- ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 37 名 (55.2%)

ここからは、[1] > [2] > [5] > [3] > [4] の順で「ンドゴ」が使用しづらくなる傾向が見てとれる。

では、このような傾向に、世代差はないだろうか。以下に、調査の結果を世代別に示す。

(3) 調査文 [1]～[5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数（高年層）

- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 20 名（高年層の 95.2%）
- ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 17 名（高年層の 81.0%）

- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名 (高年層の 33.3%)
  - ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 3名 (高年層の 14.3%)
  - ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 10名 (高年層の 47.6%)
- (4) 調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数 (中年層)
- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 13名 (中年層の 92.9%)
  - ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 11名 (中年層の 78.6%)
  - ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名 (中年層の 50.0%)
  - ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 0名 (中年層の 0.0%)
  - ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 8名 (中年層の 57.1%)
- (5) 調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数 (若年層)
- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 11名 (若年層の 91.7%)
  - ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 10名 (若年層の 83.3%)
  - ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 4名 (若年層の 33.3%)
  - ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 1名 (若年層の 8.3%)
  - ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名 (若年層の 58.3%)
- (6) 調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数 (少年層)
- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 19名 (少年層の 95.0%)
  - ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 9名 (少年層の 45.0%)
  - ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 5名 (少年層の 25.0%)
  - ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 4名 (少年層の 20.0%)
  - ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 12名 (少年層の 60.0%)

各々の世代について、「ンドゴ」の使用が多く見られるものから使用があまり見られないものへと順に並べると、次のようになる。

- ・高年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・中年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・若年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・少年層 [1] > [5] > [2] > [3] > [4]

このようにして見ると、(2) で見た傾向は、世代の差にかかわらず、全世代においてほぼ同様に認められることが分かる (少年層においてのみ、第二位と第三位の順が他の世代と異なるが、この点については後ほど検討する)。

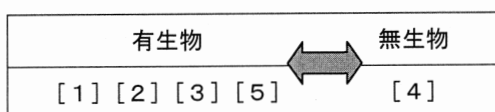
#### 4 「ンドゴ」の用法に関する考察

ここでは、以上の調査結果を踏まえ、「ンドゴ」の用法について考察する。調査文 [1] ～ [5] を再掲しておく。

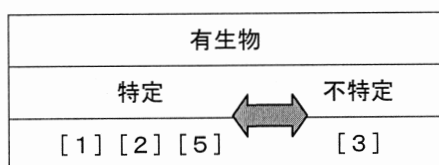
- [1] [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ンドゴ 探してきて。
- [2] [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ンドゴ 知らないか？
- [3] [今度犬を飼うことになった] どっかで犬ンドゴ 探してきて。
- [4] まんじゅうンドゴ 買ってきて。
- [5] グラウンドを走っている犬ンドゴ 見えるか？

この調査文 [1] ~ [5] は、互いに次のような相違点（と共通点）を持っている。

まず「ンドゴ」によってマークされる語に注目すると、[1][2][3][5]におけるそれが「犬」という有生物である一方、[4]のそれは「まんじゅう」という無生物である。

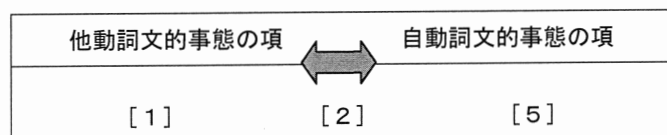


また [1] [2] [3] [5] の「犬」は、[1] [2] [5] のそれが「話し手の飼い犬」であれ「眼前のグラウンドを走っている犬」であれ、ある特定の（ポチならポチという）犬を指しているのに対して、[3]の犬は、特定の犬を指してはいない。



次に述語との関係に注目すると、[1] [2] の「探す」「知る」という動詞は、「〇〇が××を△△」という構文の「△△」に位置し得るという意味で、いわゆる他動詞であって、ここでの「犬」は、他動詞を中心として表される事態（文）の項である。それに対して [5] の「見える」という動詞は自動詞であり、ここでの「犬」は、自動詞を中心として表される事態（文）の項である。

さらに [1] の「探す」は、基本的には直接外界に働きかける行為を表していて、他動詞らしい他動詞である。一方 [2] の「知る」は、ある種の精神活動を表していて、その点で、典型的な他動詞とは距離を置いている。「みずから大人になって、はじめて親のありがたさを知る」などのように、自ずとそうなるという意味を表しうることにおいて、自動詞的な側面を持っている。つまり、[1]の「犬」は、他動詞らしい他動詞によって描かれる事態（文）の項であり、一方 [2] の「犬」は、一応他動詞ではあるものの自動詞的な側面を持った動詞によって描かれる事態（文）の項である。



以上をまとめると、調査文 [1] ~ [5] において「ンドゴ」でマークされる名詞は、それぞれ、次のような特徴を持っていることになる。

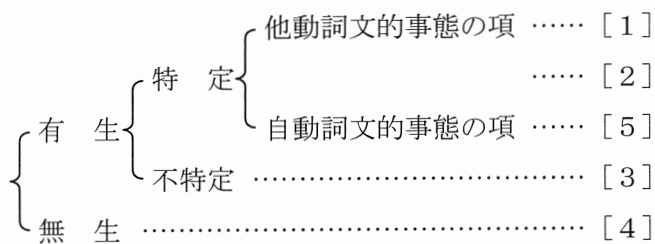


図1 調査文 [1] ~ [5] において「ンドゴ」でマークされる名詞の特徴

さて、既に述べたように、ほぼ全世代において [1] > [2] > [5] > [3] > [4] の順で「ンドゴ」が使用しづらくなる傾向が認められるのであった。このことは、「ンドゴ」の使用の適否が次のような経緯で決定されていることを意味している。

まず、「ンドゴ」でマークされる候補となる名詞（以下「当該名詞」）が有生名詞か無生名詞かによって、第一のふるいがかけられる。当該名詞が無生名詞であれば、「ンドゴ」の使用が適さない。調査文 [4]（当該名詞が無生物）で「ンドゴ」を使用する話者がきわめて少ないのは、これがこの第一のふるいによって真っ先に振り落とされるからである。

次に、当該名詞が特定のそれを表す名詞か、不特定のそれを表す名詞かによって、第二のふるいがかけられる。当該名詞が不特定のそれである場合、「ンドゴ」の使用は相対的に適さない。調査文 [3]（当該名詞が不特定のそれ）で「ンドゴ」を使用する話者が、調査文 [1] [2] [5]（当該名詞が特定のそれ）の群で「ンドゴ」を使用する話者よりも少ないのは、第二にこのようなふるいがかけられているからである。

最後に、当該名詞が他動詞文的事態の項か、自動詞文的事態の項かによって、第三のふるいがかけられる。文の表す事態がより自動詞文的なものであるほど、その項に対する「ンドゴ」の使用は、適さない。ほぼ全世代において、調査文 [1] [2] [5] で「ンドゴ」を使用する話者が [1] > [2] > [5] の順で減るのは、第三にこのようなふるいがかけられているからである。

ところで、少年層においてのみ、この点に違いが見られる（[1] > [5] > [2] の順で「ンドゴ」を使用する話者が減っている）のは何故だろうか。これは、第三のふるいのみが程度性を持っていることによって生じたところの、回答の揺れであろうと考えられる。

第一の「有生か、無生か」というふるいも、第二の「特定か、不特定か」というふるいも、どちらかといえばどちらであるか（程度）を問題にすることなく、截然とどちらであるかを決められる性質を持っている。ところが、第三の「他動詞文的事態の項か、自動詞文的事態の項か」というふるいだけが、どちらかといえばどちらであるか（程度）を問題にする。程度を問題にする場合、往々にして判断に揺れが生じるものであって、少年層に見られた他の世代との差異は、世代的な変化のあらわれというよりは、他の世代においても生じる回答の揺れが今回の調査ではここに生じたものと考えられる。

以上、「ンドゴ」の使用の適否がどのような経緯で決定されているかを考えた。図示しておく、次のようになる。



図2 「ンドゴ」を使用することの適否と、当該名詞の特徴

## 5 まとめ

以上、本稿では、次のようなことを述べた。

### ① 「ンドゴ」を使用する世代・性別

気仙沼市方言における「ンドゴ」は、老若男女の別なく用いられる。

### ② 「ンドゴ」の用法

気仙沼市方言における「ンドゴ」は、図2（再掲は省略）に示したように「有生∧特定∧他動詞文的事態の項」である名詞に対してもっとも用いられやすく、「有生∧特定∧自動詞文的事態の項」「有生∧不特定」「無生」の名詞となるにしたがって、用いられづらくなる（「∧」は連言（「かつ」）を意味する）。

## 文 献

- 佐々木冠（1998）「水海道方言の対格—有生対格と無生対格の統語論—」『日本語科学』4
- 佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版
- 佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂（2006）『方言の文法』岩波書店
- 玉懸 元（2002）「仙台市方言における格助詞相当形式『トコ』の用法」『国語学会 2002 年度秋季大会予稿集』国語学会
- 玉懸 元（2003）「格助詞・副助詞・終助詞」小林隆／編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 玉懸 元（2011）「目的語の標示形式」小林隆／編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 日高水穂（2000）「秋田方言の文法」秋田県教育委員会／編『秋田のことば』無明舎出版
- 北条忠雄（1967）「方言の実態と共通語化の問題点 秋田」『方言学講座』2 東京堂
- 宮島達夫（1956）「文法体系について—方言文法のために—」『国語学』25 国語学会